

∨
=====

∨

∨ プラネットクロニクルズ

∨ THE PLANET CLONICLES CONTENTS

∨

∨
=====

∨ 【連絡欄】

∨ ◆ unknown (アンノウン) というキャラだしたい。ユニセックスな感じで。フェデリックの上
司は、ロゴスというおっさんでしたが、色気がなくておもしろくないなあと。白紫色の仮面をつ
けています。

∨

∨ ◆冒頭の役割「ストーリーを大きく隠喩させる書き出しはさらに検討。設定を提示するキャ
ラクター・仕事・世界感

∨

∨ ◆プロット部より

- ▽ キャラクターの書き込みをお願いします。人間関係をよりリアルに設定してください。
- ▽ ω 人称だとドライになりがちなので会話と心理描写の一人称で進行する部分を多めにいれていってください。セリフもあいまいな箇所を残したまま要点だけ進行していきますので、びしびし変更していってください。名セリフも期待しています。(090713)
- ▽ 了解しました(090713)
- ▽ かけあいも長くしてもらったほうがリアルかも。ストーリーなんか関係ねえ、小説の魅力は会話なんだよって感じで攻めてください(090714)
- ▽ とくにディテールの描写の書き込みをお願いします。冒頭では宇宙船のデザイン(インテリア・エクステリア)をお願いします。細かい色の指定など想像を助ける描写をたくさんいれてください。
- ▽ 比喻表現などのいいまわしの部分もお願いします。

=====
=====

▽ 【原稿】

▽

∨ ー ー ー ー

∨ 冒頭がちょっと平板な気がしてきました。

∨ すばやくぐいぐいいくシーンを頭に加えるべきでは。

∨ フェデリックとテューボの事故のエピソードとか。

∨ ー ー ー ー

∨

∨ 「一次元」について思いをめぐらせていた一一。

∨

∨ この宇宙の始まりは一次元だという。一次元ということだろう。この世界が三次元、平面が二次元、ただの点が一次元。点ってなんだ？その点が球体なら三次元、モニターにあらわれるドットが欠落した部分のようなものなら二次元。ゆっくりと三本の軸が伸びていき、それらが交わるところに真っ白の点ができる。そこでゆっくりと軸を消し去ろうとしてみるが、うまくいかない。もう一度。今度は三本の軸すら交わらない。ゆっくり、慎重に。いつもやってるようにモニター目標物にロックをかけるように。ドットが正確に重なるように。二本にしてみよう。二本なら簡単なはずだ。そこにズームアップしていく。本当は大きさもないはずだ。し

かし、点ときいて小さなものを考えていたが、大きければどうだろう。巨大な点だ。巨大な点のはじめ飛んで真つ黒な宇宙が拡散していく。どこまでもどこまでも。白い星がまじりながら拡がっていく。

▽

▽ 「うあっ」

▽

▽

▽ フェデリック・Lコースマスは素つ頓狂な声を上げて飛び起きた。いつもの悪夢だ。滞在中の一週間は見なかつたのに、タイタンの重力圏から離れてからは、もう三日も続いている。

▽ (体が重いな、ほとんど寝た気がしねえ……。重力障害か)

▽ 壁から突き出たベッドから降りると、彼は伸びきつたヒゲをなでながら、樹脂で成型されたクリーム色の船室から這い出した。

▽

▽ 交代の時間を告げるアラームの乾いた音が左手のリストトップコンピュータから鳴るのを、右手で覆いかくす。端末を手前に掲げるとコクピットのドアがわずかな稼働音を立てて開いた。

▽ 「おう、眠り姫。起きたかよ」

▽ 口の端をゆがめながら、イタオスが声をかけた。操縦席の床に直接置かれたタンブラーの底には、乾いた合成酒が樹液のように固まっている。

▽ 「死んじまったのかと思っただぜ」

▽

▽ 重力変化で体調を崩しているフェデリックに対して、イタオスは慣れたものだ。もともと火星人は重力症候群に強い。あまたある火星民族のうち、一番屈強な体を持つペノーカ族なら、なおさらだ。赤い肌には、種族の特徴である筋張った腱が盛り上がっている。

▽ フェデリックは、いつもトレーニング室で過ごしている彼の筋力増強メニューを想像しながら、わざと落ち着き払った声で言った。

▽ 「まあ……な。で、いまどのあたりだ？」

▽ イタオスはゆっくりと左腕の端末からジャックを引き抜き、首を傾げながらイヤフォンを外す。立てた襟の奥から首の間接が鳴る。

▽ 「ガニメデまで、あと三日半……いや四日ってとこか」

▽ 「四日？、いつの間にそんなに短縮したんだ？」

- ▽ フェデリックが言い終わらないうちに、イタオスの笑い声が船内に響き渡った。
- ▽ 「あきれだぜ……おまえ、丸一日寝てたのに、気づいてないのかよ」
- ▽ フェデリックは、慌てて端末を見た。
- ▽ ー 太陽紀 6084 年 7 月 13 日
- ▽ 「いや、悪い。本当に気づかなかった」
- ▽ 「いいってことよ。おまえが寝ている間、おれはここでゆっくり呑んでられたんだから」
- ▽ イタオスは、そういうと、操縦席から跳ね起きて、床に脱ぎ捨ててあった緑色の作業ブーツを、片足で立ちながら器用に履いた。
- ▽ 「じゃあ、あとの当直はたのんだぜ」
- ▽ 灰色の縮れた髪をゆらしながら歩くイタオスの気配がドアの向こうに消える。しばらくして、食料庫を開け閉めする音がし、また操縦室は静寂に包まれた。
- ▽ 小さく柔らかな操縦席に座ったフェデリックは大きなため息をついた。
- ▽ 真つ暗なスクリーンは、この先の航路に、ほとんど何も起きないことを告げている。
- ▽ (おかしいな、最近たまにこういうことが……)
- ▽

∨ フェデリックは操縦席のリクライニングを少し倒した。地球育ちの若者としては珍しい切れ長の目に疲れがにじんでいる。うるんだブラウンの瞳が、小刻みに震える。

∨ 「――交代直後はいつもこうだ、と彼は思った。

∨ 体がじんとして目の奥に何かが沈んでいくように感じる。どろりとした比重の重い液体がゆっくりと流れ込んでいくような。さつきみた夢の感覚が残っているのか。

∨ 「あのとときだ。俺はまだあのことを悔いているのだ。」

∨ 船内から見ると外は真っ暗な闇だ。

∨ きつと外から見れば、真っ暗な闇の中を小さなドットが走るのが見えるだろう。移動しているかどうかわからないくらいのスピードでじっとしているのだろう。

▽ コクピットの小さなメインスクリーンがにじんでいる。航路と目的地までの距離、時間が刻々と変化していく。宇宙のしじまのなかをこの「空間」が移動している物的証拠のように航路上にちいさな点が映り始める。といっても、光のないこの宇宙では擬似的に描きだされた便宜的な「画像」にすぎない。「ゴミ」だ。彼らはそう呼んでいる。漫然とガニメデへの航路を確認しながらフェデリックはつぶやく。

▽ 「ここも汚くなつたもんだな」

▽ 感慨ではなく変化を報告するような、とても小さな声だった。

▽

▽

▽

▽ 人類がその領土を宇宙空間に拡張初めてまだ数十年しかたっていないのに、遺棄されたゴミが星という星を覆いつくしている。肉眼で確認はできないが、球体のまわりをびっしりと小さな点がおのおの異なった弧を描きながら回転している。

▽

▽

▽ それゆえに惑星にエントリするには航路演算の大半の時間をこの「ゴミ処理」に使うようになった。しかもガニメデのように質量が巨大になればなるほどゴミだらけだ。旧型のメカを積んでい
ては、物理的な航行速度より「頭のよさ」でそのスピードは左右される。ナビゲーションシステム
ムが見落とせば即衝突、自身もゴミ衛星の一部と化してしまふ。

▽ 「ま、だから俺たちのようなスイーパーが成り立つんだけどな」

▽
▽ テューボがその巨体を揺らしながら床面のハッチをあけた。すこし、窮屈そうに背をまるめて
コクピットに入ってくる。メインスクリーンを覗き込んだ彼は、フェデリックの脇から見慣れた
数字たちを眺めながらいつものようにキーをたたく。2、3ウインドウを続けざまに切り替えて値
をチェックした。

▽ 義手が黄土色に鈍く輝いている。そのゆっくりとしたなめらか動作には重いグリスがしつとり
となじみ、少しも軋む音などしない。

▽ フェデリックはモニターから目を逸らし、天井を見上げて、大きく息を吐いた。

∨ 相対的な理由だが、一般に船は年々航行速度が遅くなつていく。不思議に思えるが今だに技術
∨ というものは進歩する。だからといって船を買いかえる、買いかえられるのはごく一部の金持ち
∨ 企業だけだ。個人では船の認可を受けるのも面倒なうえに、到底手が出せる金額ではない。

∨ 頑丈だけが取り柄の船。テューボがかつて廃船班にいたころ、職務上スクラップから再生させ
た船だ。その特殊用途ゆえか、度重なる改造ゆえかこの3人の船は異質なフォルムをしている。
基本設計は当時一流だった素体も今では鉄屑同然の価値だ。一般人ではもうこんな船に乗ってい
る人間はいない。そのフレームに旧式部品の寄せ集め。テューボが手を入れているからまあ動い
ているようなものの、タイタンーガニメデ間で一週間もかかるようではポンコツの名もいただけ
ない。とはいふものの彼らの「業務」に必要なフックやドリルを動かす動力を搭載するにはいた
しかたない。星間飛行のスピードよりその日のメシだ。彼らの職業はスィーパー。惑星管理局よ

り認可をうけているれっきとした「公務員」だ。

▽

▽

▽ 惑星の軌道上にある無数の廃船、鉱物、廃棄物。ありとあらゆるものを回収して、物質をとりだし、還元する。物質に応じてそれぞれ、チームに分かれている。この3人は特殊鉱物班。表向きはそういうことになっている。

▽

▽ 「フェド、荷物は重いがいまのところ問題なしだ」

▽

▽

▽ 牽引している巨石は、質量からして船の何倍かわからない。スイコミと呼んでいる吸引装置でホールドリルし、ワイヤーフックがボールを握りしめたようにがっしりと爪をたてている。大きさに違いがありすぎて船か岩かどちらが牽引しているのかわからない。

▽ 「船は悲鳴はあげているようだけどね。おまえの船、というよりおまえにはほとんど感心するな。他の船とは音が違うからな」

顔を上にむけたまま、フェデリックがいう。

「そうだフェド、どこぞの巨大企業がこの星のゴミを丸ごと買い占めるって話、きいたか」

「GC社の話か」

「ゴミとそのなかに埋まってる物質の総量を試算したんだそうだ。そいつを天秤にかけて」

「そのときだ。眼前のスクリーンに「HII」の文字が赤く明滅する。まもなく鈍い衝撃が船全体を揺らした。」

「船尾に……二、三発……と。へっ、ついにお出ましかい！」

フェデリックは、上着を慌ただしく着込むと、首にかけてあった真空用のゴーグルをはめた。

「テューボ！ ちょっと出てくる！」

彼は、どんなにゴミが浮遊していようと、静寂だけは確かなこの宇宙空間に出て行くのを好んでいた。船体に攻撃を受けた場合、普通なら遠隔操作で対処する。が、この男は何よりも退屈を嫌う。

それに自分の目で見たものしか信じないのだ。頑丈なハッチをωつ開錠したら真空エリアだ。装備を整えるまで20秒自動チェックにもう20秒。

「フェデリック、また君は何かを守ってくれようとしているのかい」

代わりに操縦桿をホールドしてチューボは思う。

モニターにはもう船外に出たフェデリックの位置が罰印で表示されている。

ブリックはブリック号の船体に長い影が落ちる。無重力の中、ハーネスから巨大なカラビナを繰り出して手すりを器用に伝っていく彼のゴーグルに、問題の箇所が映った。ゆっくりと周囲を見回してから、顔を船体に近づける。

(こりゃあ、火器じゃないな……ちよつと凹んでるだけだ)

∨ と、フェデリックの頭を、四角い影がかすめた。飛んできた方向を振り返る。いつの間に現れたのか、いまにも壊れそうな小型艇が停泊していた。中の人物がこちらを見つめている。

∨ (星間難民か……出てくるんじゃないかな……)

∨

∨

∨

∨ たいていの星間難民は動力のない船で漂流する。はじめに惑星の重力に逆らうだけのスピードで飛び出さすればいい。あるいは使い捨て燃料だ。宇宙航海法で星間難民救助の義務が定められているため難民に遭遇した船は必ず接触または回収の義務がある。

∨ (やれやれ。)

∨

∨

∨

∨ フェデリックは慣れた手つきで船尾にある牽引ワイヤーのロックを解除した。スイコミには全部で6本ワイヤーフックある。現在は巨石を抱え込んでいるので、これは非常用の1本だ。いつ

もの座標位置の指定は行わずマニュアルで発射する。真空なので音は聞こえないがしゆるしゆるとワイヤーが渦を巻きながら離れていった。先端部がオートフォーカスで難民船まで向かっていく。

∨

∨ 先端がフックしたのを確認すると腰のカラビナを付け替えて滑車を滑らせた。

∨ 「……………3、……………2、……………1」

∨ 無線でテューボが到着タイミングをアシストする。

∨ リズムよく底部のハッチにつかまった。

∨ (ハンドル式なんてずいぶん久しぶりだな。)

∨ ハッチを後ろ手に閉めながら、わずかばかりの真空室に入り込む。

∨

∨

∨

∨ 船内は基本的に居住性はない。難民船は彼らのインナーワードで「棺桶」とよばれているくらい小さなロケットだ。狭い船内で人型の立体映像がぎこちなく動いている。

▽ (外から見た人影はこいつか。 ったく。 3Dホログラフィなんてずいぶん古風なガードプロ
グラムだぜ。)

▽
▽ 左腕のリストップコンピュータからアクセスを開始する。「000004sec」スリーパーのごく基
本的な権限で侵入に成功。影は瞬時に姿を消した。

▽ (ま、こんな船がアレを持つてるわけないが。 …… !なんだ?!)

▽ 船内描写

▽

▽

▽ 地球の、しかも女か？窓からわずかにのぞく細く美しく整った顔だち。女なんて遙か昔に絶滅
したんじゃないかったのか？確かに映像で見た記憶がある。それにこのエングレーブは…。喉が渴
く。

▽ 難民の「届出」のためのプロファイルディスクをコピーしようとしていたその瞬間だった。

▽

▽ 「ERROR」

☆

「……本物の眠り姫の棺桶だったってわけか。で？ どうすんだ」

動転したフェデリックの説明を受けて、イタオスが言う。

「心配ないわーアタシならここにいるから」

フェデリックの左手がカン高い声をあげる。瞬時にこの状況が飲み込めたのはチューボだけだった。

先ほど難民船で解除したガードプログラムこそダミーで、フェデリックがポートを開放した刹那、逆に相手のプログラムを寄生させてしまったのだ。

「ずいぶん古風だったのは俺のほうだったってわけ、か。」

「そゆことー。あとはあんたたちがアタシのロックキーを捜してくればいいの」

完全にはめられた。ロックキー？どうして自分でワールドスリープカプスル開けられない状況になってんだ？？いやその前に、おいおいおいおい！こいつには俺のデータ一式が入ってんだぜ。会社に賠償金なんてはらったら船やらスイーパーのライセンスやらすべてがパーだ。それにどうやってこの広い宇宙からキーなんて探すんだ？わけがわからない！チューボ「組み合わせ」でハックできないのかよ？フェデリックの目配せにチューボが答える。

「ま、三億年はかかるよ、フェド」

（やれやれ。これが俺たちとハルカとの出会いだった。そしてしばらく「職務」をぶっちぎって逃走することになったいきさつだ。）

—————

実はハルカの名前の由来かいてないなあ。

∨ 彼女のキャラをまだきめてないね。いい子ちゃんになってしまえそう。

∨ アクの強い感じにしたい。とことんお嬢にしてみようか、

∨ 津軽弁とかにするか。だっちゃんなインパクトがほしい。

∨ 「生きたいいいー！ー！」

∨ つて絶叫するシーンは必要。

∨ ーーー

∨

∨

∨ ☆

∨

∨ 大宇宙時代、そんな響きが懐かしくなるこの頃だ。人類は変わらざるを得なかった。

∨ テラ（地球）郷愁と憂いそんなものを含んだ言葉を口の中で転がしてみる。

∨ オレはあそこを「歳のとくに飛び出し、月面のシルバニアココロニーにいる叔父のところ」に転

∨ がり込んだ。まったくもってろくなところじゃなかった。

∨

- ▽
- ▽ 地球でもっとも権威ある組織が世界環境管理局（GEAB）だ。当局の言うことによると、何でもわれわれ人類の最も至高とする価値は地球という惑星らしい。完全な保護管理下のもと、あるべき自然な地球の姿が再構成されつつある。邪魔なものはみな、宇宙（アウターアース）へ開拓という名前で追い出されたのだ。
- ▽ 開拓民は赤子も同然だった。はいはいすらできなかつた。宇宙病で、開拓団の ∞ 割が壊滅した。魚が空気中をおよげるかい？
- ▽ 人類は宇宙人になる必要があつたのだ。変わらねばならなかつた。その過程で女性という存在はいなくなつた。
- ▽ オレが女だといつたのは、確かに地球でモニター越しに見たからだ。
- ▽
- ▽ ☆
- ▽ オンナはひさしぶりに目覚めてしゃべりたりないらしく、ぎゃあぎゃあうるさいのでフェデリッ

クはリストをスリープさせた。

▽ 船内にまたものしじまが訪れる。

▽

▽

▽

▽ (そうだ、思い出したGEABのロゴマークだ。ハルカの「棺桶」に彫られていたのは。おれたちはGEABにテラを追い出された。GEABは何もしてくれはしなかったんだ。どういうことだ？ハルカの乗っていた船自体はからきしだが中身は相当にデキがいい。逆に船は動力もないため速力もあがらない。カプセルはその長い航海に耐えうるよう造つてある。)

▽ 今のところGEABの計画によるものだと考えるより他なかった。

▽

▽ GEABの「崇高な」理想のためにまず犠牲になったのは月だった。

▽

▽

▽ 「死の星である月を第二の地球として再生します」というのがあいつらの大儀で、テラの前に

かならず月で実験が行われた。月さえ地球化できれば、あとはその応用という目論見だ。

∨ 人工大気、人工太陽、人工水。

∨

∨ 当初8つのコロニーが設計され、移住計画が進められたが、ことごとく壊滅した。46億年かけて創られたものが、1年やそこらで造れるわけもなかった。

∨ その後、GEABからの支援は打ち切られた。火星への光速ルートが拓けたからだ。

∨ そしてまもなく光速航海法も実用化され、大宇宙時代の幕開けというわけだ。

∨

∨

∨

∨ そう、月で最後に残ったのがシルバニアだった。生きること。生き延びること。凄惨なGEABからの独立戦争。いつか、テラと月には決着をつけないければならない。

∨ 自分の中で先延ばしにしていた答えにけじめをつけるときがきたようだ。

∨

∨

☆

▽

▽ 「ペノーカの言い伝えには、難民を助けると必ずいいことがあるというが、これじゃあ面倒を背負い込んだだけだな。どうすんだ、フェド？」

▽ イタオスが三角形の耳をひねくりながら問いかける。

▽ 「知るかい！ とにかくこのままじゃあ、おちおち仕事を続けられねえ。いったんガニメデ手前のセンターに降りようぜ」

▽ リストトップから「えー、せっかくお仕事手伝ってあげようと……」と声がした。すぐさまフェデリックは左手を振りまわす。

▽ 「うわわ、酔う酔う！」

▽ 「……では」

▽

▽

▽ 一人冷静なテューボがスクリーンにガニメデ近辺の惑星までの航路を映し出した。機械じみた高い声が響く中、フェデリックは上の空で、難民船に刻印されたGERBのロゴを見つめていた。

∨ 「神の導き」。地球ではかつて、そんな言い回しがあったらしいが……

∨ ☆

∨ 「長官、例の件でご報告です」

∨ 「入れ」

∨ せむしのミュータントが、ドアを開けると、真っ白な服を着た長身の男が振り返った。手にしている紙の束の表紙には、繊細な文字でタイトルが書かれている。

∨ ー 惑星年代記（プラネットクロニクル）

∨ 「モメンタム航法がほぼ実用段階にはいりました」伏せた額から長い毛が垂れる。灰褐色の頭

皮と奇妙に長く伸びた4本の腕。緊張のあまり太く短い尾が震えている。

▽ 「クロニクルに記されている期日は承知しているな」

▽ 「はっ……」

▽ 長官と呼ばれた男はしきりに紙の束を指で弄んでいる。

▽

▽

▽ 「まずは小宇宙内で使わせる。チップにはミュータントレベルでもクラックできるようにそこそこ満足感のあるガードでもかけておけ。いづれ無償で流布される。圧倒的なスピードを手にした人類がその欲望を大宇宙へと広げていくのは時間の問題だ」

▽ 「御意……」

▽ 「星学者たちを召集しておけ」

▽ 風防をかねた特殊ガラス製の大きな窓の外で巨大な惑星がゆっくりと昇りはじめた。

▽

▽

▽ | | | | |

▽ 長官の存在がちよっと遠いので、
▽ せまりくる感じがほしいなあ。

▽
▽ 長官と呼ばれた男はスイーパー組織のボスと同一人物であり、
▽ スイーパー組織を使ってクロニクルを探している。

▽
▽ 今、手にしているクロニクルは写本（レプリカ）。
▽ 内容にも一部欠落があり、効力はない。

▽
|
|
|
|

▽
▽
▽
▽
▽
▽
▽
☆

∨

∨ 船内ではテューボの長い講釈が続いていた。ハルカがテーブルの上で聴かされている。

∨ 「ウザいよー」

∨ 他の二人はとっくに船室へと潜り込んでしまっている。

∨

∨

∨

∨ — 太陽系小宇宙での人類の繁栄は大きく3つの技術によって支えられた。まず、【星間光速航海法】。地球で開発されたものだ。これによって俺たちはひたすらどこまでもいけるようになった。モノとしてはこいつ、この小さなハコが膨大な演算して値をたたき出す。エンジンやらなんやらは意外とお前の時代から変わってない。旧式のままなんだ。スピードを増すために出力を上げるという方法ではどんなに巨大なエンジンになるかわからないからな。それに制御対応するチップ、まあオイラが持ってきたんだけどな、そいつをつけりゃあそれでOKだ。それから【異種交配技術】テラではありあまってた人類も宇宙では少なすぎた。ま、初期には犠牲も多かったしな。すべての源は地球上の生物であることは間違いないんだが、ありとあらゆる遺伝子の交配が強固な雑種

を生み出したわけだ。

∨ ∨
∨ そして「グラフ」、簡単にいえば重力発生装置だ。あのGの社が開発した。はじまりはグラビティ・コーポレーションだったわけだ。しよせん人類は地に足ついてないと生きていけないもんなんだな。これで格段に居住性があがった。今じゃあどの船にもついてる、うん。結果資本がGのGに集中して誕生したのが「プラネット・センター」、巨大娯楽施設だ。GのGといえはいまじゃあこっちのほうが有名だけだな。お、見えてきたぜ。

∨ ∨
☆

∨ ∨
∨ ホログラフィ、広域人工視覚といった技術が進んでも、宇宙船に窓は付きものだ。

∨ ∨

▽ 黒いビロードの暗幕に、星々が散らばる。そこに燦然と輝く巨大な人工物が現れた。プラネット・センター。中央アトラスタワーを、居住区アルキオネー、商業区マイア、レジャー区エレクトラなどが取り囲む立体都市だ。ハシケから行きかうシップのすがたが見え、各区画の外壁には企業のコマージュナルがせわしなく明滅している。ブリック

▽ D&Bブリック号の横を、豪華なファミリシップが快速で過ぎ去っていった。

▽

▽

▽ ーーーーここに危機を挿入したいですーーーー

▽ ガニメデプラネット・センターの入港審査には長い列ができていた。

▽ その順番待ちをしているあいだ、BBB号船内では真剣な会議と暇つぶしのゲームがだらだらと続いていた。

▽ 議題はハルカをどうやって「持ち込むか」という問題。とその処理系の決定。

▽ 物理的に棺桶をどこに隠すかということ、プログラムチェックをどうクリアするかということ。

▽ 方法としては偽装するか、ブツをどこかへ逃がすかの二択。さて・・・

▽ |-----|

∨

∨ 「ご講釈はおわったかい？さあて、羽を伸ばそうぜ！」

∨ すっかり寄港する準備ができたらしく、船室からフェデリックが出てきた。

∨

∨

∨ 「そうはいかない、フェド、まずシップの調整が先だ。遊びで寄るんじゃない、俺たちが抱えた問題の解決が先だ。それに一週間前からB4エンジンのプリバーナの数値が50から120の間で少しぶれるんだ、タンク加圧の根元がどうやら怪しいのだが……。」

∨ 「イタオス！ ガニメデの通貨レートを調べてくれ！」

∨

∨

∨ ☆

∨

∨ 「20分前の情報で約1:64だ」

∨ イタオスが自身の端末から首を上げずに答えた。

統一レートでも買物ができるが、現地通貨と両替したほうが少しばかり得なのと、当然なにかと便利だ。いずれにしてもまず、仕事の成果である巨石を引き渡さなければならぬ。

スーパー産業で処理するのは、違法に投棄された産業廃棄物、難破した船や小さなコロニーの建築物、開拓時に粉碎した巨石。大義名分は掃除屋だが、彼らのような小さな船ではその給料だけでは喰ってはいけない。取引の換算は質量であるため大手のデカイ船がスケールメリットを生かして金を荒稼ぎする。だから彼らは宇宙ゴミに含まれているレアメタルを狙う。

分別して精製してレアメタルだけを換金する。そんなまわりくどい商売は大手はやりたがらない。

「とりあえず、稼ぎの換金だ。」

換金した金は送金しなければならない契約だ。フェデリックたちのチームは特殊鉱物の回収を主としている。特鉱班は現在、4つのチーム（船）で編成されている。その4つを束ねているのが直属の上司となるロゴスという男だ。自身も船を所有している。巨船だが動きがよい。速いわけではないがとりまわしがいい。彼を象徴するような船だ、そうテューボが漏らしていたっけ。組織の中でもリーダーは幾人かいるが、とくに優秀という評判だ。ただ、それゆえに敵も多く、フェデリックたちも直接面会する機会はない。

「だが換金屋は面倒を好まないだろう。」

▽ 組織の決まりではキャプテンのフェデリックのリストップを提示しなくてはならない。精製し、含有量を確定したあと、その鉱物の最近の平均レートで手取りが決まる。

▽
▽ 組織に属している以上、急激なレート変化はある程度緩和してくれる。バカみたいに儲かったりしないかわりにただのゴミになったりもしない。それが組織というものだ。

▽ 「握らすしかないんじゃないのか」

▽ イタオスは窓の外を眺めている。

▽ 「まあ、そうだな」

▽ テューボの画面はガスケットカタログのページを表示している。

▽ 「いや」

▽ フェデリックが静かにさえぎった。

▽ 「規約にはクルーのリストップでも構わないことになっている。キャプテンが死んだ場合には」

▽

∨ 二人が顔を向けた。

∨

∨

∨ 「それが手っ取り早い。今俺たちがしなければいけないことは換金だ、そっからさきはひとま
ずどうでも構わないだろう。仕事だからな、殺したってかまわないだろう、自分ぐらい。

∨ イタオス、あんたにまかせる。船ごと換金屋に持っていつてくれ。俺とテューボはいくところ
がある」

∨

∨

∨ ☆

∨

∨ 地下鉄の駅に向かって二人は歩いていった。

∨ まず小型艇を借りなければならない。

∨ 「なあ」

∨ フェデリックが話し始め、テューボが顔を向けた。

∨ 2人のたあいもない会話を。ただのどの奥には事故のことがある

∨

∨

∨ だらだらと広い、船の繫留地をとぼとぼと歩いてきた。高い位置からの街灯が幾重にも影を作っていた。たくさん薄い影が交わってぐるぐるとまとわりついてきた。

∨ フェデリックはテューボを気遣いながら、彼の後ろを歩いた。

∨

∨ しばらくいくとターミナルへつながる地下への階段があった。

∨ テューボが階段を下り始める。

∨

∨ 「ああ、そういや、俺、乗れないんだったわ」

∨ フェデリックが左手を掲げる。リストアップで改札するシステムだ。

∨ 一瞬間をおいてテューボが振り返って見上げた。

∨ 「わかった。いつも借りてるやつ、ここまで回してくる」

∨ ゆっくりとあるいてきたせいかここまでひどく遠かったような気がしたが、ずっと先には3人

の船がまだ小さく見えていた。

∨

∨ ☆

∨

∨ ———

∨ 一方、ハルカとフェデリックの会話を挿入。

∨ なにかなにげない会話をいれてください。

∨ ハルカの趣味嗜好がわかるような。

∨ ———

∨ 「はじめてこんなに長く話したね。」

∨ 縁石に腰掛けてハルカと話しているとフェデリックのそばに猫が寄ってきた。

∨ 「おまえはいいね。」とハルカ。

∨ 「でも猫は君のように話せない」

∨ 「話せなくてもわかりあえるじゃない」

∨ 「お互いそう思っているだけかもしれないけど」

- ▽ 「同じようなものじゃない」
- ▽ 猫が行ってしまうとハルカと少し目があったが、フェデリックは静かにリストップをスリープさせた。
- ▽
- ▽ ☆
- ▽
- ▽ フェデリックは寝転がって空を眺めていた。暗い。やおらチューボから通信が入る。
- ▽ 「小型艇を入手。ここで落ち合おう。」
- ▽ フェデリックはマップを展開し、ナビゲートを開始させた。
- ▽ （ここまでくるんじゃないのかよ。しようがない。仕事だからな。）
- ▽
- ▽ ー5分後。
- ▽ ー
- ▽ 町の描写を。
- ▽ フェデリックが歩いて指定の場所までいきます。その途中の風景。

V
V
V

V そこには見慣れぬ細長く不恰な船が停泊していた。

V

V
V
V
V

V 船のデザインの描写。

V 古い型。マニアごのみ。木製おおい。ペンキで塗ったような外装色。ぼつてりしている。

V
V
V
V

V

V 操縦席にはテューボ。見上げるようにフェデリックが話しかける。

V 「いつもの船はどうした」

V 「あれはあんたにしかかきないとよ」

V フェデリックは苦笑した。そうだった俺以外の人間には乗らせるなど重々いっておいただった。
た。

V 「で、なんで巨大な翼がついてるんだ？」

V 「56式の水陸両用エンジン。いいじゃないか。個人的な趣味の問題だ。」

- √ クラシカルな木製の操縦桿を撫で回しながらテューボは恍惚の笑みをかみ殺した。
- √ 「それよりイタオスと合流する前にいきたいところがあるんだろ」
- √ 「ああ、どうせ鉱物の含有量調査にたつぷり一日はかかる。その間に」
- √ 操縦席のテューボが目を合わせる。
- √ 「地下世界（アンダーグラウンド）へいく」
- √ ☆
- √ |
- √ 残ったイタオスの独白
- √ |
- √ (フェデリックに睡眠薬を持って船内をしらべていたのだ。やつは重力障害と思ったようだがな)
- √
- √ それにしても、とイタオスと思う。留守番で残された船内には彼一人だ。フェデリックという地球人はつくづくお人よしだ。これまでの長い旅の中で船の中に何かあるかはすべて把握している。あせることはない。まずはキッチンで飲み物をつくらうじゃないか。

∨ (オレの見立てではフェデリックは♠☆♣を探す任務を負っているはずだ……)

∨ それに関しての情報をかならず隠している。

∨

∨ 真っ赤な合成酒の瓶を冷却器にかけた。そのあいだにタンブラーに氷を入れるだけ入れ細い指ですばやく13回、円を描いた。13という数字はペノーカにとって好ましい数字のひとつだ。彼のラストネーム「ポルンガ」は火星13部族を意味する。十分に冷え切ったタンブラーに合成酒
ℵ／ω注ぐ。真っ赤な液体が冰山をすべっていく、わずかにきしんだ。

∨

∨ (もし、クロニクルが実在するとして、そんなものを探し出すことができるのだろうか。探し出し、手にいれたとしてどれだけ俺が利用できるのだろうか。そんなことは問題ではない。火星民族の復権のために、どうしても手に入れなくてはならない。俺でなくともかまわない、同士の誰でもいい。それは大きな意思で決まっていることだ。)

∨

∨ イタオスは、ペノーカの集落で暮らした少年時代のことを思った。地球人に夫を殺され、新婚ωカ月で後家になった彼の姉は、キッチンで合成酒を呑みながらふつふつと独りつぶやいている。

▽ 「クロニクルがあれば……クロニクルさえあれば、地球人なんか……」

▽ 信仰深い祖母に育てられた彼女は、クロニクルの影響を家族の中で最も強く受けていた。

▽ 彼女の失踪後、イタオスはクロゼットの中から、手紙を見つけた。

▽ ー私はクロニクルの一部になります。

▽ ごくり、と彼はのどを鳴らした。安酒が咽喉を熱くする。

▽

▽ （俺が来る前からのこの船の職務履歴、上層部とのやりとりを調べる必要がある。当然、秘匿されているだろうがな。まあ、やわらかい月の砂漠をブーツで歩いたようなもんだ。痕跡というものはそう簡単に消せはしないものだ。）

▽

▽

▽ ここに一枚の画像がある。

▽

▽ その壁にはどっちを上にしても印象がかわらないような抽象絵画がかかっている。

▽ それ以外は無機質な部屋だ。残念ながらモノクロームなので、すべての色彩は想像するしかない

いが、壁の色は白に見える。手前に巨大な机がある。そしてその真ん中に一冊、分厚い書物が乗っている。机に対して書物の比率が尋常ではない。机が小さいわけではないだろう。広大な敷地いっぱいには建てられた工業施設のようにそれは存在している。机が書物にあつらえてつくられたように、見開けばほぼ等しいサイズになるだろう。

▼ 俺が持っているのはこのクロニクルの画像一枚だ。穴が開くほど見えているし、解析も何度かけたかわからない。そしておそらくこの画像は清掃当局にもわたっている。いや俺の推測では当局にこの部屋があるとみている。これが本物のクロニクルの画像だとして、この部屋が当局にあるとして、フェデリックが探しているものは、写本、もしくはオリジナルか。いずれにせよ複数冊が何らかの理由で存在しているに違いない。

▼ 予想通り、ログは任務終了と同時に消去されているし、通信履歴もまったくくない。まあこれで証拠をつかんだともいえる。もうちょっと泳いでもらおう。

▼

- ▽ 彼はメインのコンピュータにプログラムをひとつ追加した。
- ▽
- ▽ ☆
- ▽ BBB号を換金屋に停泊させると、無線が入った。
- ▽ 「おう BBBか、帰航を祝う」
- ▽ センターからの入電にイタオスが手短かに応えた。
- ▽ 「さっそく、定量分析を頼む。次の出航まで時間がない。少量をサンプリングしての計算値でもかまわない。」
- ▽ 「……了解。フェデリックじゃないのか、やつはどおした」
- ▽ 「死人がしゃべるかよ」
- ▽ 「……………了解。」
- ▽ 管制塔の無線が一瞬とぎれた。
- ▽ 「巨石のほうはサンプリングでも2時間はかかる。牽引しているあのちっぴけな船はどうする」
- ▽ 「……ああそれは、難民船だ。そいつはかまわない」

∨ ああの女の棺。そのカードはこちらにおいておかなければ。あの地球人には悪いがこの作業艇とはこれでおさらばだ。走れる船を調達しなければ。

∨ 「……ものは相談だが、現物支給はできるか？」

∨ ブリックバイブリック号がゆつくりとの番ビットに入港する。

∨ クルーたちがライトで誘導するのがイタオスの眼下に小さく見える。

∨ 「どうということだ？すぐに換金してしまうってことか」

∨ 「ああそうだ。サンプリングでなく、全量そのまま分析にかけてくれ。それからその三分の一の金額で何か船をたのむ。」

∨ 「了解。ではリストを送信しておく」

∨ ☆

∨

∨ 一部の者の間で、

∨ フェデリックⅡ「コースマス事故死のニュースはまったく間に広がった。

∨ それが、偽装であることらしいことと一緒に。

∨ それはつまり、組織への裏切りを意味していた。

∨ 彼らたちの中で「クロニクルの発見」がまことしやかに噂された。

∨ 極秘任務での裏切りは重罪であり、契約では命とひきかえにする、とある。

∨

∨

――

アッシュラとサトルについて

小型艇を借りたテューボを尾行し、襲撃します。

名前からしてアッシュュラは武闘派、サトルは知能犯。

二人は必ず、しゃべるときに互いの名前を呼び合うという気持ち悪いやつらです。ゲイかもしれません。

彼らの任務はスウィーパーのなかでも主に爆発物を扱うセクションです。

それを利用して重火器を使って攻撃してきますが、

フェデリックは卓抜した操縦技術で、うまく挑発しながら、アッシュュラの船を墜落させます。地下世界までサトルはネチネチつきまといつてくるやつです。

ここでフェデリックが極秘任務のことをテューボに初めて明かすシーンがきます。

過去の危険は事故もそれが原因だと。

しかしテューボは友情をあつく語り、なかせるいいシーンになります。

――

「アッシュュラ。いま6120地点からロートルの小型艇が出るようです」

「サトル。了解。確認してロックオンした。やけに動きが遅い」

「アッシュュラ。間違いありません、それがターゲットです」

「サトル。市街地を抜けたところで喰らいつく」

「アッシュユラ。撃墜してはいけませんよ、あくまで拿捕するのです。宝ものが燃えてしまつては元も子もありませんから」

アッシュユラと呼んだ男からサトルと呼ばれた男は双眼鏡から目をはずすと、褐色のジャーキーをしがんだ。その表情は苛立つているようでもあり、何か楽しみのようなものを堪えているようでもあった。銀色の細い機体が都市部へ向かう渋滞の中でゆっくりと移動していた。

一方アッシュユラという男のほうは、あからさまに哄笑し「ターゲット」が通過するであろう無機質な岩山の陰に先回りして停泊させた。

「元のメッセージを隠す」

☆

惑星年代記

詩片 01

宇宙（そら）はすべての源なり。

地も光も万軍の王もそらより生まれたり。

そらは誰をか恐れん。

そらは恵みと哀れみ慈しみを汝らに永久にもたらさん。

宇は天地あまねく空間。宙は往古来今すべての時間。

- ▽ (イタオスはクロニクルをさがしているスパイで、
 - ▽ イタオスはフェドがクロニクルを探す任務についていると想定している)
 - ▽ その動機が明らかになる。
 - ▽ 火星の復興。祖国への思い。
 - ▽ そして地球との融和。
 - ▽ ピュアな理想主義者としての一面。そしてそれゆえに彼は復習鬼となる。
- ▽ 12.4
- ▽ そしてプラネットクロニクルの伝説。
 - ▽ 『P☆C』は7つある。宇宙の歴史がすべて詰まっている。
 - ▽ 『P☆C』とは欲望、魂の救済、絶対的なものへの帰依。
 - ▽ 「死ねばみんなクロニクルの一部になれる」
 - ▽ なぜ書物なのか、誰が書いているのか。
 - ▽ 書物というわさだが、本当なのか。
 - ▽ (この時代には神の概念が風化している)
- ▽ 12.5

- ▽ GC 長官の部屋。
- ▽ 風景描写。
- ▽ 長官は奇妙な儀式を行っている。
- ▽ 異種交配、新航法では、生命は救えない。
- ▽ 宇宙を発生させた意志の力ー P ☆ C を手に入れるしかない。
- ▽ 「それだけが私の人生の意味だ」
- ▽ 12.6
- ▽ プラネットクロニクル本文
- ▽ 長官は一部を手に入れている。
- ▽ (聖書を彷彿とさせる詩的文章)
- ▽ 物質としての解析と言語の解読が進んでいる
- ▽ 12.7
- ▽ 夜。
- ▽ 遠景からの BBB 号の描写。
- ▽ (カメラズームしていく)

- ▽ イタオスらしき男が脱出する。
- ▽ 離反。
- ▽ BBB号を見つめるイタオス。
- ▽ 愛着もあるが火星のために裏切ることを選ぶ
- ▽ 悲痛な覚悟
- ▽ 13
- ▽ 船に戻ったフェドとテューボは驚愕する。船が荒らされていたのだ。
- ▽ もともと金目のものなどないが、留守番で船に残ったイタオスが失踪し、困ったことに
- ▽ 例の棺桶、ハルカの肉体が盗まれてしまった。
- ▽
- ▽ 14
- ▽ 「あのカセイ野郎・・・」
- ▽ 「まだアイツが犯人と決まったわけでないさ」
- ▽ それにしてもこれは厄介なことにはまきこまれた。やはりただごとではなかったのだ。あれは。
- ▽ 犯人探しと死体消失の謎。船も動かないこの状況でどうする？

- √ 141
 - √ 送金に対してロゴスからのチームへの返信。(一方通行)
 - √ イタオスの独白。
 - √ ロゴスへの疑念。
- √ 15
 - √ フェデリック一行は古い知り合いらしいあるミュータントの店へ行くという。
- √ 16
 - √ しかし突如狙撃を受けるなど、この星の治安は最悪だ。
- √ かつては猥雑な喧騒にあふれていた場所も廃墟と化していた。それでも迷路をくぐりぬけてたどりつく。
- √ しかし当然、目的の店も何年も前から「本日閉店」の札が赤く明滅しているだけだった。
- √ 17
 - √ そこで語られる今回の目的とテューボとフェドの因縁。
- √ あの事故のエピソード。
- √ 18

▽ ここへきたのはテューボの半身を造ったテューボのおやじなら、ハルカに肉体を与えられるのでは？

▽ そう思ったからだった。

▽ 19

▽ そこでテューボのメカが反応した。店の移転場所が明らかになる。

▽ 表の世界の荒廃ふりと一転して地価都市の繁栄ふりはすさまじいものだった。

▽ 20

▽ クリーンで冷たい完全な世界。ミュータントたちは治安の悪い地表をさけて地下に完全都市を作り上げたのだ。

▽ 確かに指定の場所におやじはいた。ただ以前より若々しく情熱と野心にあふれた様子だ。「技術と時代だ」という。

▽ 21

▽ アンドロイドとして完成したハルカ。

▽ 人間の肉体とはココロとは？倫理をめぐって困惑するフェデリック。

▽ 22

- √ さらにチューンアップされ別人のように生まれ変わったテューボ。
- √ いつかは訪れると悟った別れ。
- √ 221
- √ ところで『P☆C』のうわさをきいたことがあるか？
- √ 23
- √ 「まあ金で買えるものはまた買えばいいだけのことさ」商売道具の船も質草に失ってしまった。
- √ これで本業にはしばらく戻れないことが物理的な意味でも確定してしまった。
- √ 24
- √ 高度な文明の発展をみせたミュータントたちの間では、あらたな技術の開発がなされていた。
- √ 新航海法！それをもってすれば全宇宙の事実上の掌握などたやすい。そう考えている巨大企業GCの存在があった。
- √ 25
- √ 「いずれにしても地球には向かう、女も生き返らせる」彼のおおきな夢はまだこれからだ。
- √ 船の代わりに手に入れたGの社製のコンピュータで新航海技術のうわさを聞きつける。
- √ 26

- ∨ そして、それを利用してテューボのクラッキングによってあっさり手に入れた新航海法。
- ∨ 27
- ∨ そんな時、いまや宇宙的な企業であるこの社主催の大規模な賭博レースが行われようとしていた！
- ∨ その名を「プラネット・ワン」——賞金は新星の運営権！最終ゴールは地球——！
- ∨ 28
- ∨ 必ずイタオスも出走してくる。そう確信したフェデリック。
- ∨ 出走を決意する。
- ∨ 29
- ∨ コンピュータの売却で手にした金で再び船を入れる。こちらには新航海法がある。
- ∨ 手に入れた船が馬鹿に派手で目立つ。これじゃあ旗印を掲げているようなものだ。
- ∨ 30
- ∨ いよいよ開始されるレース！
- ∨ しかしそこにレギュレーション違反である新たな航海法を持ち込むフェデリックたち。
- ∨ 31

- ▽ 「プラネットクロニクル」を掲げた不気味な狂信者たち。ミュータントとエスパーと称する人間のチーム。
- ▽ 壮絶な新航海法の奪い合い。
- ▽ 32
- ▽ 予言書「プラネットクロニクル」に仕える狂信者たちの目的とは？
- ▽ レースの本当の目的と真の黒幕とは？
- ▽ 33
- ▽ そして訪れたイタオスとの一騎打ち。
- ▽ ハルカの肉体と新航海法との交換取引をもちかける。
- ▽ 34
- ▽ イタオスを討ち肉体を奪還。
- ▽ ようやくクロニクルへ還れる……と涙を浮かべて自死するイタオス。
- ▽ ただの狂信と、クロニクルの伝説を信じていなかったフェドの心も揺れる
- ▽ 「ここまで人を惑わすPCって何なんだ……」
- ▽ 「なぜ命を捨ててまで、救いを求めるのだ」

- ▽ よみがえるトラウマ。
- ▽ 35
- ▽ レースに優勝するフェデリック。
- ▽ 新星の運営権とは地球のことだった。
- ▽ 36
- ▽ 地球はGEABの完全制御のため、通常では入港すらできない。
- ▽ この新技術の売却を条件にGEABにのりこみ、ハルカのロックキーを手に入れようとする。
- ▽ 37
- ▽ そこはGEABによって「うつくしい地球」へと回復を始めていたが、人類は滅亡していた。
- ▽ 38
- ▽ 「かなたより帰りしものがこの星の王となる」GEABの崇高な計画と人類再興の鍵をにぎるハルカ。
- ▽ 39
- ▽ 売却したGCコンピュータからモメンタム航法はいずれ漏れるだろう。
- ▽ 40

- ▽ 長い眠りから目覚め、王となったハルカの決断は完全な武装解除という方法だった。
- ▽ 4 1
- ▽ 事実上 GEAB に武装解除させた GC。
- ▽ 各勢力が牽制し、地球への侵略はとまる。
- ▽ 4 2
- ▽ 一方、新しい航海法によって大宇宙への航路が広がり、人類の興味は外へ向かうこととなった。
- ▽ はたしてプラネットクロニクルに記された通り歴史は進行するののか？
- ▽ 大いなる宇宙意思の真理をめぐって物語はあらたな幕を開ける。
- ▽ 「決めたよ、ハルカ。オレもロ☆☆を追う」
- ▽

